



発行所

兵庫県精神薄弱者愛護協会
兵庫県育成会施設保護者協議会

〒650

神戸市中央区神戸港地方口一里山
1-150

発行責任者 松山 博文

印刷所 ㈱北神折込広告社

〒651-11

神戸市北区鈴蘭台東町1丁目8-16

電話 (078)591-4611(代)

障害者の明日に向って

兵庫県民生部障害福祉課長

井 上 昭 三

新年おめでとうございます。

今年は、昨年の国際障害者年でのとりくみの成果を受けつぎ、さらに障害者の明日に向って大いなる歩みを進めてゆく年であると考えております。

国際障害者年では、県・市町・団体をあげて多彩な記念事業や行事などのとりくみがなされたほか、啓発活動の積極的な展開に加えてマス・コミの意欲的なキャンペーンもあって、大きな盛りあがりを見せ、県民の意識にこれまでにない高まりがみられました。そしてボランティアとして障害者と共に歩もうという人がふえてきましたことは、大きな喜びであります。

記念事業として県が実施した心身障害児「希望の船」、「希望の旅」も、そういう方々の輪のひろがりの中で大きな成果をおさめることができたものと、この上もなく嬉しく思っております。

申すまでもなく、障害者の福祉を増進し、障害者の住みよいまちをつくるのは私たちの願いですが、それ

には障害者の自立の努力と、県民一人ひとりが障害者を理解し、暖かい心優しい心をもって、お互いに助け合うことが、なによりも必要であると思います。

そこで、県では昨年の国際障害者年を契機として、県民一人ひとりが障害者問題を身近なものとしてとらえ、「自らに何ができるか」、「自らは何をなすべきか」を考え、実践行動をよび起こそうと「障害者にそっと手をさしのべる運動」を展開してまいりました。

こういった運動を通じての県民意識の前進は、今後の福祉を高めていくうえで、大きな力になることと確信いたしております。

愛護協会でも、クリーンキャンペーン等の記念事業にとりくまれ大きな成果をあげておられますが、これからも地域と共に生きる施設としての活動をさらに発展させていただきたいと思っております。

さて、県下の精神薄弱関係の施設は、現在、63施設があり、これらの施設の定員は三千三百名を超え大

な進展をみております。

これも愛護協会の皆様の永年にわたる努力のおかげだと感謝しております。

しかし、ご承知のように近年施設をめぐる状況は大きく変化してきております。

児童施設での入所率の低下、成人施設の不足、入所者の重度化、高齢化などにどう対処するか、また、地域福祉の進展のなかで通所施設へのニーズにどう対応するかが、これらの課題となつてきております。

これらの課題については、施設を実際に運営されている皆様方のご意見も充分拝聴しながら考えてまいりたいと思っております。

昨年末には、兵庫県国際障害者年推進協議会から知事に対して「障害者の明日に向って」の貴重なご提言をいただきました。これを受けて、県としては、今年三月を目途に「国際障害者年長期行動計画」を策定することになっております。

今年は、この計画の策定とその実現を目ざして積極的にとりくんでゆきたいと考えております。

皆様と共に精一杯の努力をしていく覚悟ですので、今後とも一層の努力をお願い申しあげ、年の初めのごあいさつといたします。

ちえおくれの問題とわたし

誕生日ありがとう運動 藤 本 隆

わたしと、ちえおくれの子どもとの始めての出会い、昭和三十七年に神戸市立室内（むろうち）小学校で、障害児学級を担任した時です。それから現在まで、十九年余りの子どもたちと生活しています。

室内小学校で、障害児教育に無我夢中で取り組む中で
①親の悩みの深刻さ、この問題は、親や家族だけではどうにもならない大問題であること。

②ちえおくれの子の生まれる原因は、遺伝はごくごく少数で、大部分は、妊娠から乳幼児期の障害によるもの。
③出現率が、意外に高率である。当時は、四・二五％といわれていた。

（この統計は数字的にあまく、現在では約三％といわれている）
の三つの事実を驚きました。

この三つの事実を考え合わせると、ちえおくれの問題は、どこか家庭にでもおこる可能性があり、決して他人事ではないのです。だが、それにもかかわらず社会一般の人々は、ちえおくれの問題にまったく無関心で、あまつさえ一種の偏見や差別をもつて、冷ややかに傍観しています。そこでわたしは、何とかして、ち

えおくれの問題を社会の問題に、みんなの問題にしなければならぬ、と強く思うようになりました。

わたしは、昭和三十八年九月、滋賀県の近江学園と信楽学園を訪ねました。特に信楽学園での一泊は、わたしにとって、とても感激的なものでした。池田太郎園長の教育愛に心酔し、永年の実践のひとつひとつを拝聴して、話は夜半に及びました。

わたしは、ほんとうの教育者にめぐり会えた喜びと共に、障害児教育への眼を開かれ「自分もこの道でがんばろう」と、心ひそかに決意しました。

その翌日 信楽学園から国鉄石山駅までのバスの中で、「誕生日ありがとう運動」の素朴な構想が、ふと浮かんできました。

それは、わたしのかねてよりの強い願いの「ちえおくれの問題をみんなのものに」と、信楽学園での感激と、わたしの子どもの来月の誕生日のことなどを、考え合わせる中で生まれてきました。

これから約二年、具体的な構想をねり、昭和四十年五月八日「誕生日ありがとう運動」が、スタートいたしました。

誕生日ありがとう運動とは、誰にでも年に一度めぐってくる誕生日。この誕生日に、今日自分が生かされている「ありがたさ」を感謝すると共に、ちえおくれの問題を中心として、福祉について考えてください。そして、みんなが、あたにかい思いやりの心を通いあわせよう。と呼びかけています。ひと口にいうと、ちえおくれの問題の社会啓発運動です。

わたしは、これから現在まで十六年余り、障害児教育にたずさわる一教師として、その余暇を、誕生日ありがとう運動の推進にあたらせていただいています。

こうして、障害児教育の現場から生まれたこの運動は、まったく「無」からの出発でした。だが、まさに「念ずれば花ひらく」で、ボランティアとして運動を推進する人、運動資金、運動論が、無我夢中で運動を進める中で与えられました。

ここで、この運動の十六年余りの歩みをふりかえり、略記します。
○「心を集める運動」に徹して。物でなく心だと思えます。この点が多くの方の共鳴を得た第一だと思っています。

○「草の根福祉運動」を目ざして。こつこつと草の根のひとりひとりに、この運動の精神を伝えることを中心に運動を進めてきました。

○「細く長く」がモットーに。運動発足当初からのモットーです。

啓発運動ですから、息長く急かす無理せず背伸びせずなどを、心がけて進めてきました。

○民間の市民運動として。特定の政党・宗教に関係なしに進めてきました。

○人々の出会いに恵まれました。

○多くの人の「仏け心」に接して。この運動によって、すべての人の心にあるあたにかいもの「仏け心」を呼びおこし引きだしてきました。

○天の助け。ピンチのたびにまったく予期しないところから、助けの神があらわれました。

○新しい道創造の喜び。小さく細い道ながら、自分たちで創造する喜びを感じながら、一人一人のボランティアが、やりがいをもつて運動を進めています。

今後、本部ボランティアと全国各地の地域社会ボランティアと友の会などが力をあわせて、「ちえおくれの問題をみんなのものに」の願いのもとにがんばります。

みなさんのあたにかいご指導とご協力を、お願いいたします。

（この文章は愛護の集いの時の講演をまとめて頂いたものです）

愛護のつどいから県への要望が生れ それを実りまで育てるのは誰か

三田谷治療教育院長 飯島十郎

今年の「愛護のつどい」は、兵庫
県福祉センター大会議室で、九月二
五日十時から行われた。

どんな多忙な人でも、どんな職業
にある人も、直接精神薄弱に関係の
ある人もない人も、この人たちと共
に何かひとつをなすことによって、
みんなの幸せを高める地域福祉活動
の振興をはかるためという趣旨をも
って、明るい世界 みんなの手で
というスローガンをかけて、開会
の趣旨説明が行われ、ついで、誕生
日がありがとう運動を主催されている
藤本 隆先生の「ちえおくれと私」
という演題の感銘深い講演を聞いて
午前の会議を終った。

午後は、児童収容施設、上野 智
氏、通園施設 門中順誓氏、成人収
容施設 内藤英雄氏、通所施設
岡崎 忠氏、保護者 橋本銀三氏と
福田武夫氏から、それぞれの立場を
代表して、貴重な研究発表がなされ、
次いで別項の如き要望書を決議して
会議を終った。

毎年の「愛護のつどい」です。
各施設から必ず代表者が参加し、会
場の熱意をより上げ、それが行政の
施策に反映していくことを念じます。

昭和五十六年度精神薄弱者対策につ
いての要望書

一、精神薄弱者の各種の疾病・傷害
に對し有効的な治療ができるよう
に、精神薄弱児者専用の治療施設・
病院を建設されたい。

なお、過渡的な措置として、対象
者が安心して治療入院できるよう
公立病院に對して適切な指導をさ
れたい。

二、官公庁は授産施設の生産品の受
入れと就労の場の提供について積
極的な対策を講じられたい。

三、入所者の重度化・老令化に對処
するため療養士、看護婦等の専門
職員をぜひ配置されたい。

四、入所者の重度化・多様化に伴う
職員定数の増員について格別のこ
高配を願いたい。

五、通園・通所の入所者の運賃はす
べて身障者と同様の割引きができ
るように配慮願いたい。

六、入所者の重度化・多様化する中
で厚生省の重度指定にもれた、又
は、はずれている重度児者に、厚
生省が重度加算支給を開始するま
での過渡的な措置として、県費で
重度加算分を支給されたい。

七、親なき後の保障のため老令化に
伴う精神薄弱者が適切な居住ので
きる終生施設を建設するようプロ
ジェクトチームを作り、具体的
な施策をすすめられたい。

私ももとしては、もっと要望したい
こともあるのだが、沢山列記しても
致し方がないので、絞った結果が右
の七項目であった。

読んでみて、この項は毎年同じこ
とを言っているようにも思う。

事案解決が頭打ちになっているよう
な危機感も覚えます。一年に一項目
でも解決していけば嬉しいのだがそ
うはいかない。さりとて、言わずに
おれば、もう必要はなくなったのか
と思われるかも知れない。反覆をい
とわず、訴えていかねばならないわ
けです。繰返し言うことによつて、
頭の底に少しでも記憶が残っていれ
ば、何かの調子で、それがよみがえ
って来る事を期待します。

現在は、国の財政もつまつてきて
おる。県としても同じことでしょう。
過般、県社協が中心になつて各業種
代表が県へ陳情した。勿論、松山会
長も参加したのだが、その時の民生
部長の回答も、国の施策をまたない
と県としては動けないということだ
あったわけです。

私たちは、ほかの予算をへらして

これをしてくれとまで言うものでは
ない。

各項について検討してみると、第
一項の病院入院の件は、一人入院す
れば、職員一人が付添う必要がある。
注射や点滴をいやがる。包帯をとつ
てしまふ。安静を守らない。排泄の
世話も必須です。少し良くなると、
歩きまわつて他人に迷惑をかけます。
こんな悩みはどの施設も経験されて
いることです。研修の場合もそうだ
が、学校などところがって常時、対象
者をかかえているにも拘わらず、職
員の数にゆとりがないことです。今
は何事も事態が平穩ならば、どうに
かしのげる処までは来しました。もう
一歩進んで、第四項でも言われてい
ることだが、職員数の充実は、これ
からの労働時間短縮の傾向ともから
んで重大な問題となつてくると思う。
処で、明るいニュースとしては、
最近各地で歯科センターが特設され
て、車いすで歯科治療がうけられる
途が開かれてきたことだ。これも長
い間、言ってきたことがやつと実現
の緒についたことで嬉しいことです。
病院についても、障害者の入院につ
いて、暖かい配慮がなされますよう
念願するものです。施設の問題解決
は私も自身の努力は勿論、行政の
適切な措置を切望します。

去る56年11月10日に行なわれました第16回施設親善陸上競技大会について、運営委員の立場、ボランティアの立場、参加施設の立場から原稿を寄せて頂きました。今後の大会運営の参考になれば幸いです。

大会運営委員の立場から

実行委員会

まず、今大会が1名の事故者もなく閉会した事に胸を撫でおろしています。そしてこの事は、この大会に参加されたすべての方々の努力と誠意によって達せられた事に感謝しております。ありがとうございます。

今大会を以下の様に分けて反省点を上げていきたいと思います。

〔性格〕競技会に主眼を置くか、親善という面にそれを置くかという問題ですが今回は重度者種目に力を入れるという事でこの問題を解決しようとしたのですが、今後皆様の知恵をお借りして充分討議が必要であると思われまふ。

〔種目〕今回は、6種目行なった訳ですが、現在の運営時間と場所を考えると数的には限度だと思われまふ。今回行なわれた種目で注目して頂きたいのは、重度者対策として取り入れられた100m走です。表彰状の枚数は多くなりしましたが、それなりによろこんで頂けたと思っています。次に昨年より行なわれているスペシヤ

ルオリンピックとの兼合の問題。スペシヤルに合わせていくと従来行なわれてきた32km等は消えていく事になりますしこれも充分討議していく必要があると思ひます。

〔競技運営〕32kmの時の走るコース(外周)の長さが短かすぎた事と確認の輪をわたす場所がすぎた事という事、800×5リレーの時にリレーゾーンに競技者以外の人が集まりすぎた事、各競技場所にハンドマイクがなかった為に進行がうまくいかなかった事、記録用紙が統一されていなかった為に集計に時間がかかった事、案内文に各種目の制限が明記されていなかった為、同時に行なわれる二つの種目に一人の者がエントリーするといった問題があった事などが反省点です。良かった事は、各施設から出て頂いた実行委員の方々が実に良く動いて頂けたという事です。

〔その他〕最後に苦言を一つ。いつもそうなのですが閉会式の後の清掃は本部実行委員のみでやっております。自分達のだしたゴミの始末は、自分達で責任をもってやってもらいたいと思います。



ボランティアの立場から No 1

神戸北ライオンズクラブ
社会福祉委員会 清水 泰博

今大会から初めて参加させてもらいましたが、とにかく園生達が精一杯がんばっている姿に感謝しました。一昔前であれば、障害者の方々がこんなに明るく楽しんでスポーツをする事はできなかったのではないのでしょうか？これも、先生方の努力が実った賜物だと思っています。

今後、大会に望む事は、職員の方々にとっては大変な苦労だろうとは思いますが、いつまでも続けていてもらいたいという事と、昨年まで参加していなかったのが、明石と比べる事はできませんが、王子の競技場がすばらしかったので今後ともできれば王子で大会をやってもらいたと思っています。

の反省と今後

当ライオンズクラブとしては、当初トロフィーと参加賞のみの寄贈という事で計画していましたが、今回運営ボランティアとして参加させて頂き、大きな感動をうけましたので今後、できる範囲内でお手伝いをしていければと考えています。(この文は、電話にてインタビューしたものを文章化させて頂いたものです)

ボランティアの立場から No 2

兵庫県社会体育指導者研究会
連絡デスク 川瀬 常美

輝く目、真剣な目、楽しそうな目、音楽にあわせて体を動かす。にじむ汗、はすむ心、幾くつもできた大きな輪に、さわやかな風、神戸学園でラジオ体操を見せて頂いたのが、最初でした。楽しい曲で健康づくりのお手伝いができればと考えてから、研究会の先生方の手で、Mrウィルビーの体操が出来、何度か手直しを加えて、夏より申し出のあった十五の園を訪れ、御指導いたしました。高齢の方が、笑顔でMrウィルビーを覚えて下さり、ジンギスカンでは楽しそうな顔が一つ二つと増え、競技大会では、大きな輪となりました。不自由な手足でも、最後までがんばって走りゴール。思わずだきついて「よくがんばったわね」各々の園の先生方が、園生を応援されている姿は、我々の目に心に、熱いものがこみあげてまいりました。私達は、沢山のすばらしい先生方に出会いました。

新しい年に、またもう一つ、楽しいリズム体操が、プレゼントできればと考えております。



「参加施設の立場から」 施設親善競技大会に参加して

三田谷治療教育院
飯島 幸恵

今年は、国際障害者年ということもあり、主催者としても、余程前から準備をし、特に神戸市が力をいれて下さるということで、王子陸上競技場で出来ることになり、競技に参加できない人は動物園見学と別コースも設定されてあった。競技は正規の審判員の参加を仰ぐこととし、万全の体制がくまれてありました。後援団体としては、神戸北ライオンズクラブが加わって頂いたので、優勝大カップを一つふえて、例年より充実したものになったと思います。

特に、ボランティアのリズム体操は、事前に各施設を廻って下さって練習を積んで出場することができたので楽しいことでした。

開会式に会場にならんだ人たちの集団を見て、こんなに沢山の子ども仲間がいたのかと、つくづく感銘を受けました。私たちも、もっとしつかりせねばいかないと、改めてその責務の重大なを痛感しました。

毎年、参加する施設の数はいふえていることと思いますが、今回、来られなかった施設の方たちも、来年は是非、代表だけでも参加して、共に生き、共に育っていくという実感を

味わってほしいと思います
私共の処は、毎年全員参加で、大部隊の応援団をひきつれて行きます。会場で昔なじみの顔に会うのも楽しみです。思いの外に大きく成長している姿を見て反省することが大きいです。それに付いても、十月下旬位に開催できないものでしょう。小さい子たちにとって、

は、十一月では少し寒くなるようです。いろいろな都合はあるわけですが、一度、みなさんで考えてほしいと思います。

今年の最大の問題点は、個人ロードレースでした。走行を確認できなかったことは、なんとしても話になりません。矢張、ちえおくれの人にわかるように、一本線を走ること。先導をつけること、走路を明確にして、要所には指導員や応援団が構える位にして、明確なものにしてほしいと思います。

それから、成人部と児童部は、はっきりと分けてほしいと思います。第一に体力がちがうのですから。優勝は多い方が、もう機会がふえて、はげみになります。

年一回の私たちの祭典です。もっとと外部の人たちも見に来てほしいです。県庁や神戸市の人たちもです。

第16回施設親善 競技会

「参加施設の立場から」 県施設親善競技大会

播磨園
武内 尚明

障害者にとって、「走る」

そのものは、生活そのものであり彼等自身の生きがいそのものであるかも知れません。今年度も例年になく親善友愛とする盛り上った競技大会が、神戸王子競技場で開催されました。当学園でも、大会に向け厳しい練習と、一人一人がもつ、目標に向って邁進してきました。

練習過程の中にこそ彼等にもち得ている本来性の発露

集合した後はきまって、これ以上の声はでないというほどの彼等の喚声合図から始まります。苦しさを増すにつれこの喚声は一段と高くなり、選手の一人が、脱落しそうになると、すぐ誰かれとなく励ましたり手をひっぱたりして態度に現します。

彼等にとって、仲間意識の中でお互いにいたわり助けあうことは、体内から溢れでる自然な姿であります。いかなる選手をも、勝利を取めた時、彼等は、同調し最高の称賛の言葉を心の中で感じているものと思います。

これは、彼等自身が日々の練習に耐えしのびやり遂げた者が、他者に対

する思いやりと、自分と共にある人間としての、尊重のあらわれ以外にありません。

走ることの医学的見地より
障害者とのかわり

運動面と知的面、この両方の機能の中枢は大腦の中で隣合せになって互いに発達を刺激しあっています。精神薄弱児(者)にとっては致命的な知能の遅滞をくいとめ、また退行を軽減できますことは、医学的に立証されています。障害者にとって運動は不可欠なことであり、個々の障害領域に応じて指導することは、言うまでもありません。

完走し、やり遂げた後の彼等の人格形成上の変化

やり遂げた後の彼等は、対人関係に於て、人の喜びが自分の喜びと感じ積極的かつ主体的に物事に取り組みようになっています。そして、また新しい目標を彼等は、自分で見つけ、歩いていこうとします。

私は、彼等のありのままの姿を見た時、彼等にとって少なく限られた目標を求める心に、新しい施設競技大会の模索を、憂慮せられずにはいられません。



中堅職員研修会に参加して

社会福祉法人くすのき会 播磨園
指導員 広岡孝一

先般開催された中堅職員研修会に於ては、県下各施設より、多数の参加を得て、真剣かつ有意義な討議がなされましたが、討議に加わり、新たな感触を持つことができ、その一端を、研修報告も含め、諸感として述べたいと思います。

研修会は、午前の部が分科会、午後は全体会という形式で行なわれ、分科会では、主として、園生の重度化、老齡化対策に焦点を絞って、とりわけ、県下各施設にあって、特に成人施設では、このことが声高に叫ばれ、老人福祉の問題として山積されていますが、各施設の地域性、施設形態あるいは指導体制、指導内容のあり方など種々であり、多岐に渡り、より広汎な意見が交されたことを実感します。

重度化、老齡化対策は、平行して取り組まねばならない課題であり、重度加算、医療加算の問題抜きでは対応しきれなく、たとえば、現実には、養護学校卒業者の中には、施設希望者がその大半を占め、重度者の入所に際しては、どこまで作業参加でき得るのか問題となり、通園に關しても、自力通園でき得ることが

入所基準となつてゐる施設も多く、職員定数を例にとつても、地域性が顕在的であり、職員不足による影響が、指導上、表面化しているケースも多くあります。

重度者の処遇改善にとつて、重度加算の問題抜きでは考えられず、また、施設内診療所を設置するにしても、医療加算の問題が阻害要因となるなど、国家行政の施策が細部にまで及んでいないからともいえます。

この件については、精薄者専門病院の設置が強く望まれます。

このように考えると、指導のあり方については、より専門的な知識が要求され、即ち、研修を通じての専門知識の養成が不可欠であり、職員の質の向上が絶対的です。その為の研修制度の確立、具体的には、ケース会議等に於ては、ケースワーカーも参加させるなど、専門のアドバイザーの参加を得て実施されるべきであり、なお重要なことは、研修で得た知識を現場で生かされることであり、また、生かされる体制づくりであると考えられます。

老人棟設置は、これらの期待の実現であり、播磨園にとつても、かね

てからのマスタープランとしてあげられていましたが、来春完成の予定であり、その指導内容については、現在当施設で行なわれている指導体制、指導内容が、効率よく導入され、特に相互扶助の精神でもって、過齡園生に対する新しい処遇が、なされようとしています。

作家、落合恵子さんの言葉を借りれば、「人生に、余りなどあるはずがない。従つて、余生とか余命とかいった形容は、論に値しない」といった、まさに生涯を通じての指導がなされるべきであり、人生の到達点に至るまでは、最大限の努力を傾注すべきであつて、その為の生涯施設の役割が、各施設にあって、大きな比重を占めるようになってきていると思えます。

全体会では、分科会報告も兼ね、親、兄弟との関係を中心として討議されましたが、育成会（保護者組織）との関わりについて、立場の相違から、多くの課題がありますが、保護者の協力については、他施設に於て、家庭寮とか、自主訓練ホームにみられるように、父兄が中心となり実施されている新しい試みが着々と進行してきています。これらの試みに於ては、資金づくりから運営に至るまで、一貫した保護者の役割が明確化されています。もちろん、職員

の参画もなくてはなりません。

親、兄弟が考え、実践していくことにより、次の段階として、地域社会へと広がるものであるから、まず保護者が率先すべきであり、今後この傾向で存続させていかねばなりません。そして、施設としては、保護者と共に歩む施設であり、その為の施設の性格、機能を明確にし、生涯を完全にカバーし得るケア体制を、保護者を中心とした地域との連携のもとで確立し、かつ、すべての人々の総意に基づいた処遇向上が計られねばならぬと考えられます。

地域の特色を生かし、地域社会との連携から、より強固な連合へと発展すべきであり、その為のたゆまぬ啓発活動は、不可避な行為であると言えらるでしょう。

来たるべき将来をめざす園生（児）にとつても、自らを励まし、また互いに励まし合つて生きる姿こそ、生彩ある姿であり、その為の憑拠となるべき職員こそ、眞の指導員でなければなりません。

研修を通じて、日々の指導上の疑問に対する解決の糸口が見い出せるとともに、自らを叱咤激励し、指導の重要さを再認識したのが、偽ざる思いです。

障害児と私

上野丘学園保母 稲葉 佳子

施設に勤務し、障害児と共に生活をはじめから、五年になります。勤務当初は、何もわからず、大学で学んだ内容とは、かけはなれている点が多く、現実の勤務は、大変に厳しいものを感じました。

をひっかかれたり、頭をたたかれたり、髪の毛をひっぱられたり、びっくりさせられたり、何度か泣かされる事がありました。このように、最初の勤務は、不安と恐怖、自信のなさで、毎日が心の重苦しいものでした。

何度か泣いたことや、勤めをやめようかと思ったことがあります。そんな時、私に決心させてくれたのが、園児A君でした。Aは言葉もなく、ただ甘え、おんぶ、抱っこを要求し、愛情不足が、それだけでもうかがえるものでした。

しかしありがたい事に、時間が解決してくれました。次第に園児と生活するうちに、相互の意志の疎通が出来るようになり、個々の園児に愛情が湧いてくるようになりました。

複雑な家庭事情で、施設に預け入れなければならぬといった環境に育ったAが、なついてくれ、毎日私が出勤して来るのを、待っていてくれました。愛情に薄いこの児が、言葉では、表現できず、ゼスチャーだけで、愛情を求めてきました。私は、その時Aだけでなく、この園児達の為に、私のできる限り、この学園で園児達と生活を共にし、勤務させていたゞくことを決心しました。

決心したものの、初めのうちは、障害児との接触の仕方、個々の園児の性質、特徴がつかみにくく、特に意志の疎通がうまくいかず、突然顔



写真
左から4人目筆者

我が子のように親しんでくれ、又、自分も自信をもって世話をしやる事が出来るようになりました。

そんな園児達が、親の元へ帰ったり、他の施設にかわって行った時には、我が子を他人に取られたような、寂しい気持ちになるものです。又、あの子は今どうしているだろう、幸せに暮しているかと思う……去って行った児どもたちとの思い出や、感傷に折にふれて……現実はその暇をくれません。

園児のうち中学校通学一名、養護学校へ五名、小学校へ三名、幼稚園へ一名通っています。養護学校へ通学している児童などは、夏冬なく毎朝六時三十分起床、そして身仕度、食事、用便、登校準備と最初は、手間取っていました。今では、園児、保母の双方とも次第に馴れて、七時三十分のバスに遅れないように、毎日規則正しい生活が出来るようになりました。

今年四月から幼稚園に通園しているBがいます。三歳で入園した当初は落ち着きのない、言葉もほとんど話せない児でしたが、一年、二年と経過して行くうちに、言葉は勿論のこと、絵画、他児との人間関係においても目覚ましい進歩があったと喜んでいきます。参観日に出席した時など、絵を描き終え、私の所へ、嬉しそうな

顔をして、とんできて見せてくれた時などは、たとえようのない充実感を覚えます。

しかし、私の力不足、勉強不足の為に、園児一人一人の理解の仕方、能力の把握、どんなところに、興味関心をもっているかということですが、

障害児だからと言って、その子が出ることで補助することは、その子を甘やかすことになり、その子の能力を伸ばすことにはなりません。園児がどのような能力を持っているか、どんなことをすることに生き甲斐を感じているかを、充分に把握することが大切であり、保母である私自身ももっと、勉強しなければ、ならないと思います。そうすることが、個人の有する能力や人格を、個人なりに発揮させてやることも出来、又興味あることを引き出すことにもなるのだと思います。

昨年は、国際障害者年でした。世界中でこの児どもたちに対する認識の高揚がおこなわれ、深い理解によって、救いの手をさしのべ、人間として生きる喜びを共に、味わえる運動が行なわれました。この国際障害者年の精神が著く行きわたり、いつまでも人々の心の燈の中で、この児等に対する愛が消えることのないことを祈って止みません。

MINI NEWS ミニ・ニュース

☆第16回施設親善陸上競技大会 開催さる!!

去る昭和56年11月10日に、晴天の王子陸上競技場において、標記大会が開催されました。

今大会は、国際障害者年記念行事の一つとして開催されたもので、会場も明石から王子に移されました。参加園生も 千三百名となり、職員、ボランティア等も加えらると、二千名近くにもなりました。さらに参加者がふえただけでなく競技種目もソフトボール投げが入り6種目となりました。

今大会の大きな特徴は、施設外の皆様の多大なる協力、援助のもとに成り立った大会であったという事です。まず神戸北ライオンズクラブの方々は、トロフィー・参加賞をご寄贈下さると共に大会運営ボランティアとして参加下さいました。次に兵庫県社会体育研究会の皆様には、大会前より名施設を巡回して頂きリズム体操の指導をして頂きました。又、当日も開会式でリズム体操



を披露して頂きました。3人目は小谷寿男氏であります。氏は、公式審判員として、打ち合わせ会、当日、にわたって、競技進行の中心となつて頂きました。さらに、明石おはよう体操会の皆様には、遠方よりご参加下さり、運営ボランティアとして終日お世話になりました。又、大会運営に役立てばという事で、ご寄附も頂きました。次に、神戸市消防音楽隊の皆様は、昼食時に、楽しいドリル演奏をみせて頂きました。最後に、兵庫県友愛基金、神戸市・神戸新聞厚生事業団よりご寄附を頂いております。さて、このように多くの方々にささえられた今大会の結果は次の通りです。

播磨園、三位 ひふみ園 ◎児童

優勝 あけぼの学園Aチーム 六分

〇八秒 二位 三田谷治療教育院A

チーム 三位 あけぼの学園Bチー

ム

(三・二幼稚園個人ロードレースの部)

優勝 平松広宜(三田谷) 同優勝

西畑剛(播磨園) 二位 宮岡浩一

(陽気寮)

(ソフトボール投げの部)

◎男子 優勝 倉本信彦 五十一 m

六〇(養徳会) 二位 竹 慶綱

(六甲園) 三位 水原悟(おかば)

◎女子 優勝 阪尾美恵子 二十四

m五(六甲園) 二位 谷口ゆた

か(さつき園) 三位 大谷(赤穂)

(立ち幅とび)

◎男子 優勝 赤坂寿治 二m五

十九(沢谷荘) 二位 山口俊一

(羊園) 三位 芦部道夫(三美育

成寮) ◎女子 優勝 大庭光枝

一m七十五(ななくさ育) 二位

坂越美香(あけぼの学園) 三位

生田悦子(香翠寮)

(職員の部)

三美育成苑チーム 二分(一

※白mについては紙面の関係上省略

させて頂きます。

☆県外一泊研修のお知らせ

来たる三月上旬に職員部会主催の

県外一泊研修が行なわれます。本年

度は広島島の2施設を訪問する予定で

おります。詳細は後日お知らせしま

す。

☆前回号のお詫びと訂正

前回号の次の箇所が違っておりま

した。お詫びし訂正致します。

①バレーボール大会の第三位は陽気寮

ではなくなくさ育学園チームでした

②P3の実態調査在籍人員の施設数

の授彦施設数は3ではなく13でした

③P4の中堅職員研修会の報告者は

ななくさ育成園の坂本千明さんでした。

後記編集

新年おめでとうございます。昨年は国際障害者年として本協会の行事にご協力いただきありがとうございました。

本年もこれを契機に、施設の体系づくりのため全力を注がねばなりません。

◎本号のためご執筆をお願いしました、県民生部井上障害福祉課長にはご多忙のところ心よくお引きうけ下さいましたことに感謝いたします。

障害者の問題については、施設、在宅の総合的な考察を行い実践せねばなりませんので、行政と一体となって推進していきたいと思

◎本号のためご執筆下さいました各位に厚くお礼申しあげます。

実のある実践記録、各施設にも充

分参考はなるものと思ひます。今

後とも施設間の交流のためにも、

どしどしご投稿下さい。

原稿には切日がございます。

投稿先

神戸市中央区

神戸港地方口一里山

神戸学園内

兵庫県精神薄弱者愛護協会

事務局へ